

学級担任からの言葉かけや行動が生徒の受容感・信頼感に及ぼす影響

学校教育学専攻
学校心理学コース
MO7043E
中川 博

1 問題と目的

近年、社会全体で人間関係の希薄化が言われている。日常的な教師と児童生徒の関係を築いていく中で、教師行動の中の言葉かけという行為は、教師と児童生徒の人間関係を築いていく重要な行動であると考えられる。

中学生を対象として、教師や仲間といった他者からの言葉かけが、他者受容感の獲得にどのように影響しているかを明らかにしようとした吉村・日角(2005)、中井・庄司(2006)らの先行研究をもとに、誉めるだけではなく、むしろ一見ささいな何気ない言葉かけを教師が行うことによって、生徒は教師から受け入れられている、認められているという感情をもつのではないだろうかと考えた。また、教師からの言葉かけや行動が生徒の教師からの受容感を高めることができるものであるとすれば、日常的に行われる教師からの言葉かけは、受容感のみならず信頼感の重要な規定要因の1つになるのではないかと考えた。

そこで本研究においては、①中学校生徒が学級担任から受ける、肯定的、否定的、および中立的な言葉かけや行動についての尺度の作成、②学級担任の言葉かけや行動と受容感および信頼感との関連、について検討することを目的とし、質問紙調査を実施した。

2 研究I-1

教師の生徒に対する個人およびクラスメイトやクラス全体に対する言葉かけや行動について測定する項目を作成し、その信頼性を検討する。
調査の手続き

中学生を対象とした、学級担任の生徒に対する個人およびクラスメイトやクラス全体に対する言葉かけや行動について、生徒がどのように捉えているかを測定する尺度を作成し、H県のH大学大学院の大学生、大学院生108名を対象とした予備調査を行った(有効回答数106名)。
結果・考察

個人の生徒およびクラスメイトやクラス全体に対する言葉かけや行動の尺度において、主因子法・プロマックス回転による因子分析の結果、両尺度ともに「ポジティブ・ニュートラルな言葉かけや行動」と「ネガティブな言葉かけや行動」という2つの因子が抽出された。ニュートラルな言葉かけや行動は生徒においてはポジティブな言葉かけや行動に近いものとして捉えられていると考えられることが示唆された。

3 研究I-2

研究I-1で作成した尺度を用いて教師の生徒に対する個人またはクラスメイトやクラス全体に対する言葉かけや行動について、中学生がどのように捉えているかについて明らかにする。
調査対象者

A県B町立C中学校の1~3年生の生徒455名(有効回答者数445名)であった。

調査内容

- ①個人の生徒に対する言葉かけや行動の尺度
- ②クラスメイトやクラス全体に対する言葉かけや行動の尺度

結果・考察

両尺度とも研究I-1と同様に2因子が抽出された。研究I-1と因子間相関について異なる

る結果が出た。

4 研究Ⅰ－3

教師が生徒に対する個人またはクラスメイトやクラス全体に対して行っている言葉かけや行動について、教師自身はどのように捉えているかを明らかにする。

調査対象者

中学校に勤務している教師 113 名（有効回答者数 112 名）であった。

調査内容

- ①個人の生徒に対する言葉かけや行動の尺度
- ②クラス全体に対する言葉かけや行動の尺度

結果・考察

主因子法・プロマックス回転による因子分析の結果、個人への言葉かけや行動については「賞賛・感謝」、「傾聴・声かけ」、「比較・繰り返し注意」、「人前・いやみ注意」の4因子が抽出された。クラス全体への言葉かけや行動については「見守り・声かけ」、「繰り返し注意」、「雑談・声かけ」、「大声・怒鳴り」の4因子が抽出された。生徒個人に対しては、事前に想定したポジティブ、ニュートラル、ネガティブに分割した因子が抽出された。クラス全体に対しては、ポジティブ、ニュートラルという内容より、行動・言葉かけの2因子が抽出された。生徒はポジティブなものやニュートラルなものを近いものとして捉えているが、教師は別のものとして捉えていることが示唆された。

5 研究Ⅱ

研究Ⅰ－2で作成した尺度を用いて教師の生徒に対する個人またはクラス全体に対する言葉かけや行動と、教師からの受容感、教師に対する信頼感との関連を明らかにする。

調査対象者

A県B町立C中学校の1～3年生の生徒 455名（有効回答者数 445名）であった。

調査内容

- ①個人の生徒に対する言葉かけや行動の尺度
- ②クラスメイトやクラス全体に対する言葉かけや行動の尺度
- ③教師への信頼感尺度（中井・庄司（2006））。この尺度は「安心感」、「不信」、「正当性」から構成されており、本調査でも同様の3因子が確認された。
- ④教師からの受容感尺度（八木（2003））。この尺度は1因子構造のものである。

結果・考察

「受容感」に対しては、個人および、全体へのポジティブ・ニュートラルな言葉かけや行動、「安心感」に対しては、個人へのポジティブ・ニュートラルな言葉かけや行動、全体へのネガティブな言葉かけや行動、受容感、「不信」に対しては、個人および全体へのネガティブな言葉かけや行動、受容感、「正当性」に対しては、全体へのポジティブ・ニュートラルな言葉かけや行動、受容感が有意な影響を及ぼしていた。先行研究と同様に、誉めたり、励ましたりすることが受容感に影響していることが示された。また、全体へのネガティブな言葉かけや行動が多いと感じている生徒は教師からの受容感をあまり感じていないことが示された。

6 総合考察

生徒はニュートラルな言葉かけや行動をポジティブな言葉かけや行動と同じ意味合いとして捉えていたことが示唆された。あいさつなどの日常会話を増やしていくことが、受容感につながっていくと考えられる。また、教師の言葉かけや行動は信頼感生起のための規定要因として捉えることができると考えられ、誉めたり、あいさつなどの何気ない言葉かけを増やしたりしていくことにより、教師に対する信頼感が増していくと考えられる。

主任指導教員 浅川 潔司
指導教員 秋光 恵子